

軍艦島見学記

日出彦

軍艦島はすでに多くの書物やテレビなどで紹介されている、いまや高名な観光名所である。Dokugaku の皆さんの中にもすでに訪問者がおられるかもしれない。

長崎市観光の 2 日目、ホテルを 8:30 過ぎに出て、近くの大波止ターミナルに向かった。ホテルのある五島町とは市電でひと駅の距離で歩いても行ける。何しろぶっつけ本番の勘を頼りの一人旅である。運よく午前中に軍艦島観光できるようなら乗船し、ダメなら市内観光の続きを考えていた。急ぐわけではないが、今日中に帰宅するつもりだ。



ターミナルは左の写真に示す潜水艦のような曲線からなる構造物である。発券窓口に着くと、9:00 に出航するから早く乗れという。すでに 2, 3 分過ぎていたが、そこから 2 号栈橋までさらに 5 分、自分を乗せて直に出航した。観光船はマルベージャ 3 号といい、軍艦島まで約 1 時間の行程である。



船内のスナップを左に示す。前方に軍艦島のポスターがなければどこの船だか分からない。キャビンにいてもつまらないので、デッキ出でたが、風が強く帽子などは飛ばされそうだ。

出航後、すぐに乗務員が首から下げるカードを配布する。「軍艦島見学者」と書かれたボードで裏には注意事項が書かれていた。



注意事項とは、「1. 見学施設区域以外の区域に立ち入らない。2. 見学施設においては、次の行為をしない。(1)柵を乗り越えるなど危険な行為 (2)施設を汚す行為 (3)飲酒 (船内を含む) (4)喫煙



(5)他人の迷惑となる行為 3. 安全誘導員その他の係員の誘導・指示に従う。 4. ごみは持ち帰る。」というものである。世界遺産に申請し、ノミネートされたという。

船は三菱重工の広大なドックを右手に見ながら、間もなく女神大橋の下を通過する。この橋は平成17年にできたそうで、全長 800mというのは横浜ベイブリッジを上回るといふ吊橋だ。ここを出ると、長崎港の外になる。暫くは海ばかりで、沿岸の陸地は見えるが集落がところどころ見えるばかり。

軍艦島は俗称で、正式名は端島という。江戸時代は佐賀藩領で、瀬といわれる小さな岩礁のような島だったが、明治に入って三菱で海底炭鉱と



して開発し、埋め立てを繰り返して現在のサイズになったという。

出航から約 30 分が過ぎ、艫にいた乗組員が「そろそろ見えてくるよ」と教えてくれる。右手にリゾート地のような島が見えてくる。これが飛島で海水浴場になっているらしい。やがて、前方の島影を縫って、およそ島らしくない幾何学的な形の島が見えてきた。



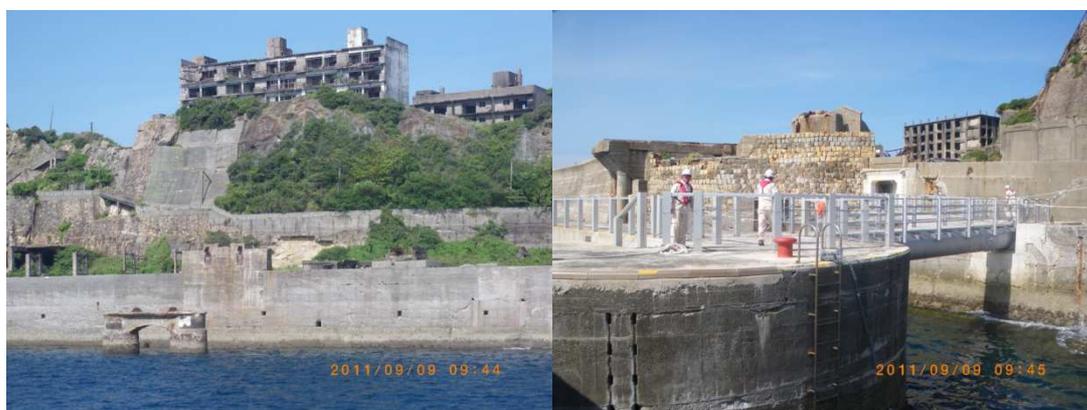
軍艦島だ！

予定より早く着いた。軍艦島が廃墟であることを知らなければ、この位置では無人島とは思えない。しかし、船が近づくに従い、廃墟の様相が濃くなってきた。



船は上の写真の左方の小山の下あたりにある接岸部に近づいていく。船内の説明でドルフィン栈橋という名前を知った。何度か台風で流されては作り直し、確か現在で3代目という。現在の埠頭は下の写真のようにしっかりした作りになっている。

栈橋を渡ると、前方に短いトンネルがあり、それを潜ると集合場所に着く。



現在、見学路はよく整備されているが、2か月前の台風で破壊され暫く上陸できなかったということを知られる。ガイドの説明では1年の1/3程度しか上陸できる日はなく、今日

は運がよいとのこと。2週間前にも台風の接近で荒らされ、後始末の清掃点検が済んだのが先週になってからという。この島は台風の害ばかりでなく、冬になると波の荒い日が続き、島を周回するツアーに変更せざるを得ないこともしばしばだという。



これは web からとってきた軍艦島の見学コースの地図である。残念ながら、廃墟内に入ることにはできない。島の端から眺めるだけである。従って、廃墟マニアさんには物足りないかもしれない。かつて5000人もの居住者がいた島は、全くの死の島になっている。

さて、先ほどの見学者カードの紐の色で3つのグループに分かれて見学することになる。



とりあえず、廃墟の写真をご覧いただこう。黄色いシャツのガイドさん3名が3か所の見学広場にそれぞれ待機していて説明する仕組みである。説明は元居住者なので真に迫っていて、面白い。



見学路は舗装されていて、瓦礫でけがをする心配はない。これは見学広場2からの写真で、正面に見える灯台は肥前端島灯台といい、この島で唯一稼働している施設である。灯台の右隣の建物は幹部職員住宅であった。下の赤レンガの壁が資材事務所で、その裏に坑夫のための公衆浴場があり、黒い体の汚れを洗い流したという。



これは第 3 見学広場からの写真である。住宅地の団地跡である。このような廃墟化は台風などの自然の力による。例えば団地は当時まだサッシを使っていなかったため、木造の窓枠が腐って欠落しコンクリート部だけが残されているという。世界遺産の登録を目指しているが、時と共に破壊が進んでいくのをどう食い止めるのだろうか。



第 1 見学広場近くから正面の白いビル、端島小中学校跡、を遠望する。小学校と中学校は一緒に建物にあったという。その手前の鉄骨は体育館だった。L字型につながって見えるビルは炭坑労働者の居住区である。左上の写真で、学校の手前に見える鳥居のような柱の列は石炭を運ぶベルトコンベアの支柱跡である。この付近に石炭の貯炭庫があったらしい。



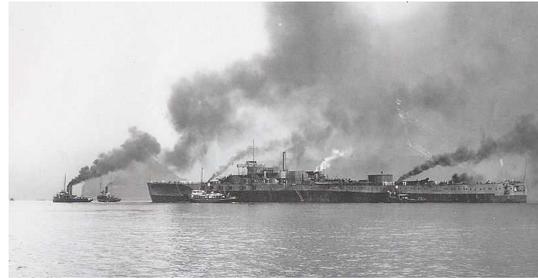
本日は快晴であり風もなく、島の上は暑く汗ばんでくる。瓦礫の廃墟の見学が済むと、乗客は再びドルフィン桟橋を渡って、船に急ぎ、思い思いに咽喉の渴きを癒している。

船は、これから島をぐるっと回って帰路に就く。軍艦島の別の顔に直面することになる。

軍艦島とは裏側からみた島の形がそう見えたから名付けられたそうである。古く、大正時代に名付けられたという。帰ってから調べると、戦艦土佐に似ていたからということであった。



左の写真は裏側から見た軍艦島である。下のモノクロ写真はWikipediaからとってきた戦艦土佐の写真である。



似ているだろうか？

かつて岩礁だったところが島の小山になっていて、そう見えなくもない。



裏側に回ると見えてくる住居跡は、都市の団地そのものの外形である。

世界遺産に仮登録されてから、廃墟マニアは締め出されてしまったという。帰ってから web にアップしているマニアの写真を見ると、内部は瓦礫だらけで相当危険である。そこで、無装備の観光客が入り込むと、けがをしたり、墜落したりするリスクがあるだろう。

島には神社と寺もあったというが、今では神社の面影の一部が残されているだけである。木造の建造物は風化で破壊され朽ちてしまったという。



軍艦島は人の創作物には寿命があり、もし手当（メンテナンス）をしないと土に戻っていく事実を見える化した遺産である。ローマの遺跡のように……。でも風化が早い。

船は軍艦島を一周してから帰路に就き、11:30頃に再び長崎港へ戻ることができた。小生は悠々と長崎駅始発の特急かもめ、博多行きに間に合った。以上で報告を終わる。